



人を幸せにするおカネとは

株式会社 URUU 代表取締役
グロービス経営大学院 専任教授
江上 広行

おカネは ヒトを幸福にするものなのか？

それともヒトを不幸にするものなのか？

ヒトが生きていくときのお金に関する悩みはつきません。それは私たち個人の生活においても、親子や夫婦、友人の関係においても、事業をやりくりする会社経営においても、そして国家財政や国と国との関係においても同様です。生活者、消費者、ビジネスマン、コミュニティの一員、政治家など、私たちが担うどのレイヤーやどの役割をとっても、お金の問題がつきまといまいます。

2022年11月にエジプトのシャルム・エル・シェイクで開催されたCOP27で、最後まで議論がつくされたこともやはりお金の問題でした。気候危機の問題は貧しく脆弱な国々や人々を犠牲にしています。2022年にパキスタンでは、豪雨による洪水で国土の3分の1が水没し数百人が死亡、その被害総額は300億ドル相当に及びました。それは、これまで、先進国が経済成長のために化石燃料を使いつくしてきた影響が、長い時間を経て地球上の異なるところで出現した症状のひとつでした。現在でも温室効果ガスの約半分は、約10%の最も裕福な富裕層の人たちが排出しており、それは未来の想定し得ない被害を及ぼすことになるでしょう。

COP27では、深刻な被害に見舞われている発展途上国を支援するための基金を創設するかどうかについて、先進国と途上国の間で会議日程を延長して議論が繰り返されました。最後はアメリカなどの先進国が妥協し、具体的な出資金額をいくりにするかなどは先送りにした形で、基金を創設する方向性についてなんとか合意にこぎつけました。

こうしたお金と環境や社会にまつわる問題は、地

球上で場所や規模を変えて、似たような形をして出現します。人の行動特性は共通しているからです。

私は金融業界に長く身をおいて仕事をしていますが、ここ数年金融庁が「日本型金融排除」という言葉を使って、本当に資金を必要とするところに資金が供給されていない日本の金融構造に対して問題を指摘しています。多額に貯蓄されている資金の運用先が、東京の大企業や債券投資などに集中し、成長のエンジンとなるべき若手起業家や、地域創生に必要とされるポテンシャルのある企業に供給することができていないという問題です。

これは、日本の経済や社会が持続的に発展するためにお金を適正に循環させることができていないということであり、COP27で議論されていた先進国と途上国との格差構造とも類似しています。競争原理が働く市場経済は、必ずと言って良いほど社会の最も脆弱なところに犠牲者を生み出します。銀行が金融リテラシーの低い個人の顧客に対して、カードローンなどを過剰に販売し多重債務者を生み出す原因となる問題が指摘されています。少々古いデータですが警察庁によると、2019年、多重債務が原因と見られる自殺者は679人に達し、全自殺者に占める割合は2013年を底として増加傾向にありました。このタイミングは国内銀行のカードローン残高が急速に増加した時期と一致します。

近年、私たちのお金に関する問題はより複雑化しているように感じます。金融庁は2019年に、人生100年時代を見据えた資産形成を促す報告書で、長寿化によって95歳まで生きるには夫婦で約2千万円の金融資産の取り崩しが必要になるとの試算を示したことが話題となりました。80代の高齢の親が

自宅にひきこもる50代の子どもの生活を支え、経済的にも精神的にも行き詰まってしまう「8050問題」も深刻化しています。また、新型コロナの影響で増加した自宅での引きこもり現象は、ネットでの買い物や、スマホゲーム、ギャンブルなどへの依存症を加速させた側面もあります。中小企業の後継者不足の問題は同族企業における事業承継に関する資金不足の問題とも関係しています。

競争原理に基づく市場経済では格差が生み出される構造から逃れられません。弱者には負債を背負わされることの不安をもたらすだけでなく、勝者でさえも常に競争を強いられ続けることに苛まれます。

このような複雑な状況にある中、私たちは、おカネや金融とどのように向き合っていけば良いのでしょうか。そして、子供たちだけではなく、大人を含めたすべての人々がお金や金融に対して何を学び、どう向き合っていく必要があるのでしょうか。

おカネの起源からおカネを考える

ここで、お金とはそもそも何かという話をしてみたいと思います。そもそも人類はなぜお金という道具を生み出したのでしょうか。

お金の起源については諸説がありますが、最も一般的に言われてきたのは、「大昔、物々交換があり、その不便さを解消すべく、商品の中から変質しにくい金属などが選ばれておカネとなった」という考え方です。紀元前2000年ごろ、古代メソポタミアでは牧畜の進展によって部族間での交易ニーズが高まる中、鑄造技術が発展し、重さで価値の計測できる銀貨が作られたのが「硬貨」の始まりだと言われています。

しかし、「おカネ」には硬貨に至るまでの前史が存在しています。ヒトは集団としてコミュニティを形成し、協働しながら文明を築いていくという特徴をもっている種です。ヒトは、コミュニケーションの手段として、微細な感情を表現する声を発したり、多様な表情で感情を表現したりすることができる「顔」という機能をどの生物よりも進化させて社会性を築いていきました。そのコミュニケーションは言葉というメディアを作り出し、さらにそれが文字

や数字としても記録できるようになりました。この文字や数字を使って、記録したことのひとつが、おカネの起源であるという説があります。

ヒトが人間関係を維持し社会性をたもつために行う特徴的な行為は「贈与」です。「贈与」は、その時点では見返りを求めるものではないので、「硬貨」が表していた等価交換ではありません。その代わりに、ヒトは贈与してもらった証として感謝の感情を文字や数字で記録しようとしてきました。今日で言うと、会計における、負債の記録に近いと言えます。それは必ず、誰かに対して恩返しをしなくてはいけないという負債の感情のようなものであり、今日という「信用」という概念に近いそうです。



西太平洋のヤップ島の「石貨」
冠婚葬祭に贈られる一種の儀礼的贈答品として使われた。山梨中銀金融資料館所蔵。

感謝や畏敬の対象は、直接贈与を受けた相手だけではなく、「恩送り」としての他者や、ときには祖先や自然や神に対するものも含まれます。ギリシャの古代のオボルというおカネは、神に生贄を捧げるための串でした。日本語でおカネを表す貨幣という漢字の「弊(ぬさ)」は神前に供える布帛(ふはく)を意味しています。つまり、交換経済が発生する前のおカネは、借りたものを必ず返すという約束＝「信用」から発生した人間が、協調的行動を表現する方法としてその価値のシンボルとして創造されたのです。

おカネは、その後、時代を経て様々な権力と紐づく形で進化を遂げていきます。ローマ帝国では、おカネは国家権力と紐付き、税金徴収や外交のツールとして使われるようになりました。中世のヨーロッ

パでは十字軍の傭兵への給与の支払の役割を担ったベネチアの商人たちが、強盗にあうリスクを避けようとおカネの預かり証を発行し、それを他の商人からでも引き出せるようにするようになったことが(今日の手形交換機能)、今日的な決済機能をもつ銀行の始まりです。銀行が、国を跨いだ決済機能を持ち始めると多国間の取引を加速させていく梃子になり、今日までにいたる経済のグローバル化を促進しました。

銀行は、自分たちが預かったお金はすべて金庫に置いておく必要はなく、自分たちに信用さえあれば、預かった額の何倍も融資することができます。そのことに気がついたストックホルム銀行は預かった金額を超えて融資を始めました。これが、銀行が実質的におカネを発行できるという、「信用創造」のはじまりであり、これも今日の銀行がもつ金融機能の中核をなしています。オランダの東インド会社で始まったとされている株式会社制度は資本と経営を分離することで、事業のリスクを分散させつつ圧倒的に生産性が高い、経済発展をもたらすエンジンとなりました。この流れからイギリスで産業革命が発生し、それが資本主義のエンジンとなって世界へと広がっていったのが、今日にいたるおカネと金融の潮流です。

我々現代人が「お金」を「稼ぎや資産の象徴」としてとらえている感覚は、産業革命後、資本主義が隆盛して以降のことで、ここ200年ほどの最近のことだということがわかります。資本主義は、人間の生活の中から「働く」という機能を分離させ、労働時間の中で、おカネを稼ぐビジネスマンというワークスタイルを生み出しました。また、資本主義は市場経済の競争原理の中で機能しているので、現代人は「競争に勝つこと」や「稼ぐこと」を常に求められています。しかし、そこには必ず勝者と敗者が存在し、格差を生み出すばかりかそれが常に拡大し続ける構造を作り出します。今日では、「お金をもっていること」と「お金を稼ぐ能力があること」をヒトの価値におきかえてしまう能力主義的な思考が先進国では蔓延しています。

我々は「選択できる自由」を手に入れながらも、

同時におカネに対する不安や恐れを抱え続けるという代償を支払いました。実際に資本主義以前は、統合失調症やうつ病は存在しなかったとも言われています。

こうしておカネの歴史をふりかってみると、おカネは、さらに金融や経済も、人々が豊かな社会で暮らしていくための「手段」であったはずのものが、いつのまにか「目的」になってしまい、それが我々自身を不安に陥れているということに気がつきます。

お金の悩みに対する心理的アプローチ

しかし、おカネは道具にしかすぎません。お金にコントロールされるのではなく、おカネと上手に向き合いながら、おカネをコントロールすることが大切です。

欧米では、おカネと金融の仕組みについてきちんと理解し、自律的・主体的にお金と向き合っていくための金融教育が進展しています。日本でも2022年(令和4年)4月から、学校における金融教育が義務化されることになりました。金融広報中央委員会が作成した金融教育プログラムでは、小学校から高校までに学習する金融教育を次の4つの分野に分けた教育が、行われることになりました。

- 生活設計・家計管理に関する分野
- 金融や経済の仕組みに関する分野
- 消費生活に関する分野
- キャリア教育に関する分野

これらの項目は、個人が自分で資産を管理・形成していくために、正しい金融知識をもち、お金に関するあらゆる場面で、適切に判断できる能力を育成しようとするものです。銀行や保険、証券会社など金融機関は、このファイナンス領域での「お金」の問題を解決するために、投資や資産運用に焦点をあてたサービスを提供しています。

一方で、お金の悩みには、もうひとつ見落されている視点があります。それは、お金に向き合うときのヒト内面にあるメンタルの側面です。

たとえば、1万円というお金の価値は誰にとって

も等価となる1万円です。ドルに交換されるとしても、時期によって変動はするものの、一時点ではその交換レートはほぼ同じです。しかし、そのお金に対する価値“観”はそれぞれに異なります。自分で稼いだ1万円をパーツと使ってしまう人もいれば、中々使わずに貯め続けようとする人もいます。

アメリカの金融心理学で有名なブラッド・クロンツ博士はこの価値“観”のことを脚本や台本を表す「マネー・スクリプト」と命名しています。「マネー・スクリプト」は、その人の人生におけるさまざまな体験の積み重ねによって「お金に対する思い込み」として形成されてきたものです。

クロンツ博士は、「マネー・スクリプト」について大きく「金銭忌避」「金銭崇拜」「金銭地位」「金銭警戒」の4つのタイプを示しています（表1）。

「マネー・スクリプト」はアンケートに答えることで自己診断できるツールとしてWeb等でも公開されていますので、みなさんも試してみると良いでしょう。

	お金に対する価値“観”	いきすぎると
金銭忌避	お金は汚い お金は嫌い	お金の管理ができない 無駄遣いをしてしまう
金銭崇拜	お金があると幸せ お金があればもっと〇〇できる	お金がないと終わりだと感じる お金のために手段を選ばない
金銭地位	お金こそ地位だ お金をもっている人がエライ	借金をしてまでブランド品を買い漁る お金がない人を見下す
金銭警戒	お金はいざというときのために 貯めておくべきもの 無駄遣いをしてはいけない	節約がいきすぎて人生を楽しめない 大切なときにお金が使えない

表1 クロンツ博士によるマネー・スクリプトの4タイプ

「マネー・スクリプト」のいずれかの傾向は、誰しもがもっているものであり、それ自体が良い悪いというものではありません。むしろ、自分自身の傾向を知り、それが自分自身のどのようなメンタルモデル（固定化された観念）と紐付いているかを知ることが大切です。

たとえば、「金銭崇拜」タイプの人には、「お金をもっていることと幸福であること」を同一視するがあまり、お金がないことが「人生終わりだ」と悲観的に考えてしまう傾向があります。

ノーベル賞を受賞したダニエル・カーネマンは「年収7万5000ドル（日本円にして約800万円）までは、年収が増えるとともに幸福度も向上するが、

それを超える収入の上昇は幸福度の向上との関連が薄れる」ということを解明しました。一定の安全と安定生活水準を確保するまでは、お金があった方が幸福感を得られるのですが、それを超えると、幸せかどうかは、お金とは関係がない、人とのつながりや、自分らしく生きているかなどの要素にシフトしていきます。

著者も関わり日本人1,653名にアンケートを行って実施した「主観的幸福度とお金の使い方」に関する調査でも、幸福度は収入などの属性よりも、「使いかた」に影響をうけることがわかっています。偏相関分析から導かれた幸せになるおカネの使い方の傾向は次の4つに集約されました*。

- ・友人のために使う
- ・社交のために使う
- ・独りでいるためには使わない
- ・経験のために使う

これらは、「利他」や「つながり」「感謝」という要素が含まれており、前述したお金の起源の要素と一致するところも興味深いものがあります。

むすび

さて、本稿でお金を漢字の「お金」とカタカナの「おカネ」と表記を変えていたことに気がついたでしょうか？

お金には、二種類の要素があります。利潤を最大化するための「お金」と、つながりと感謝を最大化するための「おカネ」です。前述した研究を行ってきたコミュニティでは、前者を、ゼニカネを表す「ゼニー」、後者を、笑顔を表す「エミー」という通称を付けています。もちろん、市場経済の土俵のうえで活動している我々にとって「ゼニー」は不可欠のものですが、おカネには「エミー」の要素があることを感じとり、幸福を得るための手段として、おカネと向きあっているようにしたいものです。

* 保井俊之（創啓大学ソーシャルシステムデザイン学部学部長・教授）、江上広行、末吉隆彦らおカネのもち方及び使い方に関する50を超える学術論文から、主観的幸福度(subjective well-being)に関係するとされている55の要素を特定個人の属性（性別、職業、収入、負債、学歴並びに年齢）幸福度及び性格指標（幸せの4因子、PANAS、SHS、SWLS、ビッグファイブ）日本人1,653人に7点法のアンケート調査